



奥州市消防団第35分団第2部

阿部睦雄 班長

Profile あべ・むつお
昭和32年長野県生まれ。57年に結婚し、衣川へ移り住む。アスパラガスやカリフラワーなどを手掛ける専業農家。父、妻と3人暮らし。衣川区長袋在住

大地震で消防団員としての使命を果たす

消防団活動の中で最も印象深いのは、大きな被害をもたらしたおととしの岩手・宮城内陸地震です。

田んぼに出ていたわたしは、ドーンという地鳴りの後、今まで体験したことのない強烈な揺れを感じました。ヘルメットを取りに家の中へ入ろうとしましたが、激しい余震が続き入ることができません。ヘルメットをあきらめ、地域の人たちの家を回って、火の元の点検やけが人の確認などをして歩きました。「大変なときに来てくれて心強い」と感謝されたのを覚えています。

仕事などに出ていたほかの団員たちも、戻ってきて防災活動に当たりまし

た。自分も大変でしたが、地域の人たちのことが心配でした。ほかの団員たちも気持ちは一緒だったと思います。

その後、通いながれた地元の道路を点検して歩き、危険な箇所には土のうやコーンなどを置いて注意を促しました。また、北股川の上流でせき止め湖が発見された際には、土石流の警戒にも当たりました。わたしの地区は震源地に近かったのですが、重傷者は出ませんでした。本当にホッとしています。

この春、消防団は一つになりましたが、わたしたちの活動に変わりはありません。これまでどおり、消防団としての務めを果たしていきます。

父母の背中を追い 消防団への道を歩む

消防団に入ったのは、地元に戻ってきて就職したのとほぼ同じ時期だったと思います。父と母が消防団員として活動していたので、消防団はとても身近な存在でした。その影響もあって、わたしも消防団へ入ろうと自然に考えるようになったのだと思います。

就職先の建設会社では、偶然にも会長が旧江刺市消防団の幹部でした。消防団活動に非常に理解があり、仕事中でも快く現場へ送り出していただいています。

地元の消防団に入ってみると、ほかの団員は、昔から知っている近所のおじさんたちでした。当時、わたしもだ

いぶ若かったのですが、気心が知れた人たちだったこともあって、すんなりとなじむことができたと思います。そして消防団員として必要な心構えや知識、技術などいろんなことを教えていただきました。また、ほかの分団と連携すること多いため、消防団活動を通じてたくさんの知り合いができたことも大きな財産です。

現在、団員としてポンプ操法はもちろん、まとい振りやはしご乗りにも携わっています。火災など危険な現場に出動することもあります。自分の安全を確保しながら、地域の安全を守っていききたいと思います。



奥州市消防団第13分団第2部

佐藤崇史 団員

Profile さとう・たかし
昭和56年江刺区生まれ。水沢工業高校卒業後、平成14年に饒丸謙建設に入社。父、母、妻、息子と5人暮らし。江刺区田原字稻荷在住

消防活動を支える 女性消防協力団体

全体の火災のうち、約6割が建物火災だという事実をご存知でしょうか。住宅火災を防ぐためには、家庭で火を取り扱う機会が多い女性たちの防火活動が不可欠です。そのため全国各地で、一般の女性で組織される消防団体が結成されています。

市内でも、婦人消防協力会や婦人消防協力隊と呼ばれる女性消防団体が各地区で活躍しています。これらの団体では、火災予防知識の勉強や地域住民への防火啓発、初期消火訓練といった家庭防火に役立つ活動を中心に、幅広い活動を行っています。消防署や消防団と協力しながら、女性の目線で地域の安全に努めているのです。



万が一に備え救護訓練を行う女性隊員

わたしたち奥州市消防団はことしの4月、これまでの36の分団を維持する形で誕生しました。2350人という団員定数は、県内でも2番目の規模になります。これだけ大きい組織になると、統率していくのが大変ではないかという不安も正直なところあります。以前、市内で消防団長を務めていた方が「和衷協同」という言葉をいろいろな場面で話していました。この言葉の意味は「心を一つにして共に力を合わせる」ということ。例えば組織が大きくなったとしても、団員同士がしっかりと意思疎通をして、一丸となつて消防活動に当たっていくことが、そうした不安を乗り越えることにつながるのだと思います。

統合一年目のことしは、団員が一堂に会して防災訓練を行います。やるからには住民の皆さんにも参加を呼び掛け、大規模な災害を想定した実践的なものにしたいと考えています。また、出初式も一カ所で行う予定です。団員や消防車両などによる大規模な分列行進をぜひご覧ください。ことしは間に合いませんでしたが、消防競技大会も合同で開催できればと考えています。互いに競い合うことは、消防団全体のレベルアップにつながっていくはずです。こうした合同での活動を積み重ね、徐々に団員同士の連携強化や一体感の醸成に努めていければと思っています。昔は農作業でも何でも、互いに助け

合わせた自助・共助の形を実現しているのが消防団や自主防災組織です。「自分たちの地域は自分たちで守る」。消防団は、地域に密着しながら、奉仕の志を持って活動しています。地域を災害から守っていくためには、住民の皆さんの理解や協力が欠かせません。自助・共助の心を忘れずに、わたしたちと共に地域を守っていきましょう。

県内第2の規模を誇る新生消防団 住民と共に地域を守り続ける



奥州市消防団

千葉昭道 団長

Profile ちば・あきみち
昭和28年胆沢区生まれ。水稻や和牛繁殖などを手掛ける専業農家。胆沢区消防団長、奥州市連合消防団長などを歴任。ことし4月から現職。父、母、妻、娘夫婦と6人暮らし。胆沢区小山字丑転在住

VOLUNTEER
FIRE CORPS

統合という新たなステージへ 消防団員たちの声

